



広島工大同窓会会報

第 37 号

発行 広島工業大学同窓会
編集 同窓会編集委員会

731-5193 広島市佐伯区三宅2丁目1-1

広島工業大学内

TEL 082-921-3121 (内線) 8103

E-mail: dosokai@jim.it-hiroshima.ac.jp

U R L : http://www.jim.it-hiroshima.ac.jp/dosokai/



最近思うこと

広島工業大学同窓会副会長
荒谷 壽一

突然に同窓会会報編集委員会から封書が届き、中身を開いてみると執筆のお願いであった。内容についてはお任せと書いてあるものの、任せられると何を書いているのかなか出てこない。むしろ題が決めてある方が書きやすいかな、なんて嫌みなことを頭の中で考えてみるが、文才がないものは原稿用紙を机に出したまま、日数が過ぎてしまう。もうこれ以上はと自分でいやいや筆を執ったものの、頭に浮かぶことは愚痴ばかり。そこで土木卒業生として素直に今思っている建設業界について書いてみた。

どの業界にも言えるが、建設業をとりまく環境は日に日に厳しさを増してきており、特に公共事業そのものに対する国民の意識も大きく変化している。無駄な税金を使っている工事などには当然の事ながら批判の目が注がれ、本当に必要な工事も含め全てが悪者としてマスコミに取り扱われるという、今まで経験したことのない状況に置かれている。確かに無駄な工事が多々あったと考えるが、今後の少子高齢化時代に向けて、社会資本整備は今からしっかりと取り組んでいかねばならない。特に生活に密着した社会資本整備はまだ先進国の中でも大きく遅れをとっており、下水道の整備、電柱の地中化、都心部の交通の混雑、環境に配慮した町づくりなど、やらねばならないことは枚挙にいとまがないほどだ。しかしバブル崩壊後（この言葉ももう聞き飽きた言葉である）すでに10年を越え、デフレスパイラルのまったただ中で全てが悪循環。ますます不景気が侵攻し、企業も給与カットのみならず、リストラと称して人員の整理を断行せざるを得ない状態までになってきている。若い学生もなかなか自分の行きたい企業に就職が出来ず、フリーターと称する人が400万人もいるようだ。こんな世の中どこか変だと思いつつも、この日本は何事もないように今でも幸福そうに見える。これでいいとは誰も思っていない。しかし何をすれば良い方向へ変化していくのか全くの手探りといった感がある。とにかく焦燥感でいっぱいである。あまりにも長すぎるトンネル、これ以上続くと気概とやる気が薄れてしまいそうになってくる。一生懸命ない知恵をしばり、新しい世界を求めて汗をかき動いてみるが、そう簡単に答が出るものはこの世界にはない。「若い能力と知恵を集めて」とは思うものの、こんな見えない、先の読めない時代に学生を採用したくても出来ないもどかしさ。

国の経営も今が一番の正念場だと思っはいるものの、国が立ち直る前に中小企業が市場から寄り切られてしまいそうな感がますます強くなってきた。市場原理、弱肉強食、競争原理、理屈は

よく理解できるがなかなか身体になじまない。原理、原則、良いとか悪いとかは別として、農耕民族が狩猟民族の生き方をとにもかくにも取り入れなければ、生き残れない時代になってきた。長年培われた日本民族の文化がその手のひらを返したように変えられず、頭で分かっているながら身体がなかなか覚えてくれないというのが現状である。何でもかんでもアメリカとヨーロッパが優れているとは思えない。しかし何故日本の強いところと良いところを残せないのかと、いくら嘆いてみても解決策は出てこない。物事をアメリカ人的に考え、行動も取り入れるべくアメリカに行くか？今さらそんな勇気も時間も残されてはいない。今流行りの成果主義なるものを取り入れ、とにかく利益さえ出れば良い。利益を出す為には手段を選ばず、常に株主に顔を向け顔を伺うこととなる。結果として短期間で利益のみを確保するという道を選択し、株主の批判をかわすために粉飾決算に手を染めることとなる。現実にはアメリカではこのような事件が大企業で起こっている。やはり企業の経営は少し長いスパンで考え行動するものであり、しっかりと地に足の着いた経営こそ、企業継続の基本であると思う。従って日本はなんといっても社員あつての企業であり、日本独特の終身雇用はしっかりと堅持し、その中から「うちの会社」という愛社精神が生まれる。この終身雇用の中に評価をはっきりさせていくことが必要である。この良き日本文化と家族的な風土を否定する事は国の大きな損失となると思う。若い人に夢と希望がもてるような社会、自分の能力を発揮できる場をもっともっと広げることこそ、今大事である。いつまで痛みを耐えられるか長い長いトンネルから抜け出すべく、自分にむち打って知恵をしばりだしている最中である。

同窓会の皆さんもそれぞれにご苦労されていることと思います。お互いに良い考えがあれば、いろいろお聞かせ願いたいものです。さて学園も平成18年度には50周年を迎えられます。急激な社会変化の中で、学園をとりまく環境も大変厳しいものがあると思いますが、今後は小学校を含め大学に至るまでの学園として、今までの良き伝統を受け継ぎ、新しい歴史を作られていくものと思います。同窓会はすでに3万人を越える数となってまいりました。この力を総合力として活用することこそ、誰もが望むところであります。広工大卒業生も還暦を迎えるOBも出てまいります。考えれば素晴らしいことであり、力強さを感じます。我々OBとして学園、そして同窓会が新しい時代に向け、大きく羽ばたくことを期待してやみません。お互いがんばりましょう。



大学と同窓会

広島工業大学 学長
茂里 一紘

同窓生の皆様、お元気でご活躍のこととお喜び申し上げます。同窓会の皆様には、日ごろから、同窓会奨学金基金など母校の事業にご協力いただき感謝申し上げます。

小生、この4月より、櫻井前学長の後任として学長職を拝命しております。いつまでもこのようなことを言っているはいけないのですが、他大学からの転職でまだ戸惑うことも少なくありません。しかし、広島にある工業系私立大学として本学の果たすべき社会的使命をはっきり意識して職務に当たりたいと念じております。

私学では、建学の精神による学風が大切です。本学には、「教育は愛なり」という建学の精神がありますが、「人を大切にすること」学風があるように感じています。建学以来、前理事長のお考えが浸透しているものと思います。「人とのかかわりを大切にすること」と言ってもいいでしょうか。その意味では、同窓会を大切にすることは本学の学風そのものです。

4月19日に開催されました同窓会総会に初めて出席させていただき、一夕にして長年本学に在籍していたような気持ちにさせられました。6月28日の高知支部の集まりにも出席させていただきました。3月卒業したばかりの社会人1年生が同窓生として仲間入りしておりました。今後とも都合がつく限り各地の同窓会には出席させていただきたいと思っております。10月11日には長崎支部のホームカミングの集いがあると聞いております。

「現代の高等教育」（大学教育を始めとする高等教育に関する学術誌）の419号（2000年6月）に、「大学にとっての同窓会」という特集が組まれています。その中で、国立学校財務センター天野郁夫氏は同窓会の役割を歴史的に概観しています。「同窓会は第一義的には同窓生の親睦団体である」が、同窓会によっては、「大学の支援団体であった」り、「事実上の設置運営主体になっていた場合もある」（例：慶応大学）とのことです。また、「大学の成長・発展のための苦難の道」の中で、「教員や学生たちだけでなく、同窓生も積極的に参加した」「たたかう同窓会」もあったとのことです（例：明治大学）。しかし、大学の拡大とともに、「同窓生同士の絆も弱いものになり」、「同窓会は親睦団体としての性格をますます強めるようになった」、「新規卒業生の同窓会加入率が、年々低下しているという声」もあり、「同窓会の歴史的使命は終えたように見える」と。しかし、そうした変化の中で、「私立大学が、同窓会の重要性を再評価しはじめて」おり、「大学と同窓会の間に、いま新しい関係をうち立てる必要な時代がきていると見るべきかも知れない」と結んでいます。同窓会の再評価です。



早稲田大学の事例の中で、「母校は校友（卒業生のこと：筆者注）にとって社会的背景ともいえるべきものであり、そして母校の名声は、社会の舞台面に活躍する一人ひとりの校友をスポットライトのように引き立てる

役目を果たすのである。その逆に、校友の社会的評価は直ちに母校の名声に反映するものであり校友の学業や地位が高まることによって、母校の名声はますます輝くのである」という大濱信泉元早稲田大学総長の言葉が紹介されています（前掲誌、村上義紀「早稲田大学校友会の昨日・今日・明日」）。それはどこの大学にも当てはまることです。

先日同窓会総会で、私は、「皆さんから戴いた4年間の授業料は4年間に限るものではない、4年間の授業料には卒業後も本学に出入りすることや大学との関係を持つための費用も含まれている」と申し上げました（「私は7年納めました」というOBがいました）。大学とそこで学んだ者との関係は4年間（7年間？）で終わるものではなく、卒業後も続くものであるということと言いたかったのです。ちなみに英語で卒業生のことを「Alumni」と言うことがありますが、本学の酒見先生の説明によれば、語源はラテン語のalere（辞書の見出し語はalo）で、1）養育する、育成する、2）（家畜を）飼育する、3）助成する、進める、上げる、増す、成長させる、で、その過去分詞形が名詞化したものだそうです。大学と同窓会は、互いに養育しあいそしてともに成長しあうと、勝手に解釈しています。

そんな視点から、大学でもいろいろなことを検討してもらっています。「生涯にわたって卒業生を支援する一手段としての同窓会」という考え（前掲誌、長島 昭「慶応義塾大学」）もその一つです。現在検討中の「エクステンションセンター構想」での卒業生向けのキャリア・ディベロップメント・サービス（新しい分野の勉強、再就職斡旋など）がそれにあたります。産学連携については、「母校とOB経営者を結び橋渡し」という同窓会からの提案で既に動き出しております（「広島経済レポート」2003年4月3日号）。今後、さらに情報を共有できるようにしたいと考えています。

同窓会の母校への貢献も「エクステンションセンター構想」からみでいろいろ話しあわれています。ボランティアとしての母校の教育への関与、各地区にあっての支店的役割などです。長年続けられている同窓会奨学金基金はずばらしい貢献です。

ところで、このたび長崎支部がホームカミングの集いをもちます。世話をしておられる小西先生には、3月の卒業式にあわせて卒業後25年組のホームカミングの実施ができないものか検討をお願いしております。卒業後の25年には、OB一人ひとりそれぞれいろいろな歴史があることでしょう。その貴重な歴史を携えて、卒業式に参列してもらおうというものです。社会へ巣立つ若者の式典でのそのようなOBの陪席は、学長の式辞以上に、卒業生に多くのことを語ることでしょう。OBには、これから社会に巣立つ若者の晴れがましい姿に25年前の自分を重ねてもらっていいのです。あるいは、一堂に会した1000名の若者の「勢い」を感じてもらっていいのです。それは、若者を抱える大学なればこそ与えることができる、社会の第一線で活躍するOBへの「銀卒式」のメッセージです。巣立ちの若者と貴重な歴史を携えたOBとの卒業式を是非とも実現したいと願っています。

もちろん、同窓会の第一義的に重要なことは親睦です。特段排他的になることはありませんが、多感な青春時代を同じキャンパスで共に過ごし、共通の経験を持つ気心知り合った者同士で語り合うことは何と素晴らしいことでしょう。その意味でも同窓会はずっと活用されてもいいのではないかと思います。

「人とのかかわりを大切にすること」は、時間に耐え長く続けば続くだけ、その価値を増します。まさに同窓会そのものです。50年を迎えようとしている学園にあって、互いに養育しあいそしてともに成長しあう意味で、本学の同窓会はいまや佳境に入りつつあると言ってもよいでしょう。

卒業生の皆様のご健勝と一層のご活躍を祈ります。

第38回定期総会の報告

広島工業大学同窓会 幹事長 桜井 元康

平成15年度広島工業大学同窓会総会が、4月19日(土)に広島県民文化センター(鯉城会館)にて開催されました。

横山会長の挨拶から始まり、式次第に則り、平成14年度活動報告、会計報告、会計監査報告、続いて平成15年度役員選出、活動方針、予算案が審議されました。



平成14年度においては、4人の副会長のもと会計、財務、事業、支部活動の4つのプロジェクトについて検討を重ねてまいりましたが、平成15年度はそれらのプロジェクトの結果を踏まえて同窓会を運営していくことを目標に掲げました。なお、役員改選については別記の通りです。

総会に先立ち行われた総会記念講演では、講師に広島工大環境学部の菅雄三(すがゆうぞう)先生をお招きし「宇宙から地球環境を考える」というテーマで約80分間にわたり講演を行って頂きました。講演会場はほぼ満席で大変盛況でした。

総会後の懇親会には鶴 衛理事長、高木俊宜総長、茂里一紘(もりかずひろ)新学長ほか、多数の先生方のご参加を頂きました。吉田 幸さんの司会のもとでは進められ、広島パトンYOSAKOIチームによる「YOSAKOI花車」、来場された教職員全員の紹介、小西正明先生先導で出席者全員による大学歌斉唱などもあり大変盛り上がりしました。また今後の産学連携を念頭において、母校の全教員の顔写真入名簿の配布、研究内容や経歴を紹介する「研究シーズ集」の紹介も行われました。



平成15年度同窓会役員

支部欄...地域支部代表者

	氏名	卒業年学科		氏名	卒業年学科	支部
相談役	中原 重男	41 電子	幹事	手越 義昭	49 建築	
"	永見 憲吾	42 "	"	植村 邦彦	56 "	
"	道田 憲治	45 経営	"	西田 弘展	45 経営	
会長	横山 健次	44 建築	"	広重 隆	45 "	
副会長	荒谷 寿一	47 土木	"	近宗 貴	45 "	
"	井手 俊彦	43 機械	"	松広 斎	48 "	
"	松本 雅行	42 電子	"	加藤 伸吾	H4 "	
幹事長	桜井 元康	63 機械	"	込山 篤史	H13 "	
副幹事長	久保川 淳司	62 電子	"	脇坂 憲太郎	H9 環デ	
"	鈴村 文寛	62 "	"	小川 博道	H10 "	
会計	重広 孝則	46 電子	"	大橋 裕輔	H15 "	
"	河野 和宏	60 建築	"	上山 和宏	H15 環情	
会計監査	森京 正	53 "	評議員	折田 昌弘	38 電子	島根
"	高瀬 明	49 機械	"	長弘 光高	41 "	山口周南
書記	岡本 信義	57 電子	"	木山 了至	42 "	
"	中畑 佳二	H5 経営	"	山口 克徳	45 "	
幹事	砂田 謙二	39 電子	"	隅本 聖	46 "	
"	村田 弘志	41 "	"	風本 理	51 "	愛媛
"	寺地 越二	41 "	"	森本 房義	41 電気	
"	川畑 敬志	42 "	"	乃美 健治	42 "	
"	片山剛之丞	42 "	"	打田 博之	44 "	名古屋
"	玉野 和保	44 "	"	落久保 晃	56 "	
"	沖根 光夫	44 "	"	坂本 幸雄	45 機械	
"	湯尻 照	39 電気	"	峠 勝義	46 "	
"	猪上 憲治	42 "	"	内田 和博	46 "	
"	中田 時生	46 "	"	松村 拓典	51 "	
"	小川 英邦	56 "	"	中田 敬司	58 "	
"	中西 助次	43 機械	"	和田 一雄	47 土木	広島第一
"	小西 正明	43 "	"	山本 良仁	47 "	長崎
"	森滝美治郎	43 "	"	山田 忠秀	48 "	福岡
"	中村 省三	46 "	"	馬場 富蔵	44 建築	
"	小池 利明	52 "	"	加藤 恵子	45 "	
"	水落 健治	61 "	"	梶山 孝之	49 "	
"	松岡 泰弘	63 "	"	山野 正晴	54 "	
"	中村 繁治	H7 "	"	西山 賢	57 "	
"	伊藤 秀敏	45 土木	"	新保 栄一	45 経営	
"	菅 雄三	50 "	"	山崎 博明	45 "	
"	大林 眞	55 "	"	指山 紹男	48 "	佐賀
"	村中 昭典	59 "	"	堤田 英治	49 "	
"	高崎 健二	H4 "	"	藤原弥寿子	61 "	
"	羽原 徹	H5 "	"	新原 永子	H13 環デ	
"	菅原 辰幸	44 建築				

平成14年度同窓会会計報告

収支決算	
平成14年度総収入	26,985,683
平成14年度総支出	19,988,748
残高	6,996,935

収入の部	
平成13年度繰越金	3,996,185
入会金	3,468,000
終身会費	18,954,000
総会会費	465,000
預金利息	7,178
雑収入	95,320
合計	26,985,683

支出の部	
印刷製本費	2,592,975
会合費	1,193,276
支部費	685,000
助成費	644,125
卒業記念品代	497,280
通信運搬費	4,439,493
消耗品費	665,960
旅費交通費	693,160
役員手当	35,000
委託費	1,240,426
保守費	0
福利費	13,173
慶弔費	38,875
賃借料	6,320
備品費	0
雑支出	42,810
同窓会基金繰入金	2,000,000
奨学基金繰入金	1,655,875
記念事業準備金繰入金	2,000,000
予備費	1,545,000
合計	19,988,748

基金の部	
平成13年度繰越金	152,954,329
同窓会基金繰入金	2,000,000
記念事業準備金繰入金	2,000,000
預金利息	350,780
合計	157,305,109

奨学金の部

基金	26,494,399
奨学基金繰入金	900,000
助成費剰余金	755,875
預金利息	56,374
奨学金	900,000
寄付金	954,483
合計	28,261,131

平成15年度予算

収入の部	
平成14年度繰越金	6,996,935
入会金	3,423,000
終身会費	19,782,000
総会会費	500,000
預金利息	7,000
雑収入	50,000
合計	30,758,935

支出の部	
印刷製本費	3,400,000
会合費	1,600,000
支部費	1,200,000
助成費	1,400,000
卒業記念品代	600,000
通信運搬費	5,600,000
消耗品費	1,200,000
旅費交通費	1,600,000
役員手当	35,000
委託費	1,700,000
保守費	100,000
福利費	30,000
慶弔費	150,000
賃借料	100,000
備品費	100,000
雑支出	70,000
同窓会基金繰入金	5,000,000
奨学基金繰入金	900,000
記念事業準備金繰入金	5,000,000
予備費	973,935
合計	30,758,935

広土会創立35周年記念事業開催報告

広土会創立35周年記念事業実行委員会幹事
廣本 忠典(土15期)

1. 広土会

広土会は、昭和43年10月に建設技術の向上、会員の親睦等を図ることを目的に広島工業大学工学部土木工学科の卒業生、在校生及び教職員を構成員として結成された組織です。土木工学科は、平成9年度に建築学科を融合し建設工学科と改名されました。広土会は、現在、建設工学科内の本部をはじめ全国に11支部を置き、会員数も4000名を越える大きな組織に発展しております。会員は、全国はもとより世界各地において、建設業界をはじめ数多くの分野で指導的役割を果たすとともに、社会・経済の発展に大きく寄与しているところです。

2. 記念事業開催の趣旨

広土会創立35周年を迎え、これまでの歴史を振り返り、会員の親睦を深め、今後の広土会とその会員がより一層社会に向けて飛躍し、21世紀の明るい未来を力強く歩いていくことを祈念して開催いたしました。

3. 記念事業の内容

(1) 記念講演会

日時：平成15年7月12日(土) 17:15～18:15

場所：リーガロイヤルホテル広島3F宮島の間

演題 土木工学の新たな挑戦

講師 櫻井春輔氏(前広島工業大学学長)

聴講者 約160名

(2) 祝賀懇親会

日時：平成15年7月12日(土) 18:30～20:30

場所：リーガロイヤルホテル広島4Fロイヤルホール

来賓 鶴 衛理事長 櫻井春輔前学長 横山健次同窓会会長

参加者 約400名

4. これからの広土会

昭和63年9月に開催しました広土会創立20周年記念事業及び平成10年7月の広土会創立30周年記念事業に引き続き、今回、35周年記念事業を開催しました。これまでの記念事業は、広土会本部を主体として全国の会員を対象に開催しましたが、今回の35周年記念事業は、平成20年に迎える創立40周年記念事業までのつなぎとして、広島支部及び広島西支部が中心となって広島県内及びその周辺を対象に企画したものです。昨今の厳しい社会・経済情勢、特に会員の大部分が所属する建設産業を取り巻く環境は非常に厳しい中、それでも約400名の会員が集結し、記念事業は盛況のうちに終了いたしました。あらためて『広土会』のパワーを実感したところです。社会・経済の先行きはまだまだ不透明ですが、広土会は、建設産業の一端を担う集団として、技術向上のための情報を交換し、会員相互間で交流を深め、毎年新しい会員を迎えながら発展を続けていきます。われわれ広土会会員は、諸先輩方が培ってきた広土会の歴史に敬意を払うとともに、さらなる飛躍に向けて若い力を加え40周年、50周年へとつなげていきたいと考えています。



同窓会地域支部情報

長崎県支部総会(母校へのホームカミング企画)	10月11日(土)15:30～	広島工業大学および沼田校舎に於いて
愛媛県支部総会	10月11日(土)18:30～	シャトーテル松山に於いて
岡山支部総会	10月11日(土)17:30～	第一イン岡山に於いて
島根県支部総会	10月11日(土)17:30～	労働会館に於いて
徳島県支部	10月25日(土)18:10～	魚民 徳島店3Fに於いて開催予定
山口周南支部総会	10月25日(土)18:00～	ホテルサンルート徳山に於いて

同窓会奨学金基金へのご寄付のお願い

同窓会奨学生の財源は、会員の皆様からのご寄付によって賄われております。資金確保のため、ご協力をお願いいたします。

要領は下記のとおりです。

金額：1口 1,000円

送付方法：郵便振替(同封の振替用紙をご利用ください。)

ご注意ください

最近、同窓会あるいは広島工大就職部と名乗り、勤務先などを尋ねる電話がかかっているようです。

同窓会および大学では、電話により個人データの調査は行っておりません。

また、金融商品などの勧誘電話で迷惑しているなどの情報も届いております。会員の皆様、どうぞご注意ください。